

楽しいコトを
意味あるコトに
意味あるコトを
価値あるコトに



はじめに

パノラマの石井さんからお話をいただいて、この成果指標委員会に参加してずっと思っていたことは、ここでのやりとりはそれぞれの専門領域を横断する瞬間があり、このようなメンバー構成だからこそ浮かんでくるものが多いし、そして、こんな自然な形でいろいろ言ったり、考え込んだりすることはあまりないなあということです。

校長として学校で仕事をしている時には、この委員会のメンバーは学校の「外部」からの「お客さん」であり、たぶん、このような構えで対話することはできなかったという気がします。

しかし、この委員会では「私たち」という感覚があったように思います。私たち一人ひとりがお互いに身近な存在になることで協働は始まるということを実感できた委員会でした。委員一人ひとりとは異なる意見をもっているし、局面としては一定の緊張感もあるのですが、しかし、ともかく「私たち」を構成し、だから、対話の中で何かが絶えず生まれているということだと思えます。

現在、仕事が分業化され、標準化される流れがあり、単純に細分化された仕事が標準化された場合に、そこでは数値化が可能となり、それをデータとして客観的に評価することで説明責任が果たせるという文化があると思います。人と関わる仕事も分業化が進みましたが、支援に関わる仕事にはそう簡単に標準化できない局面があり、その場その場で対応しなければならないこともいろいろあります。支援の現場のある局面で、こうすればよいのではないかと手ごたえを感じることがありますが、それを言語化する作業はこれまであまり行われてこなかったのではないかと思います。

この委員会で、この支援に関わる仕事を丁寧に言葉にしていく作業の難しさを感じると同時に、いろいろなところで何かとても面白いものが言葉にされるのを待っているという感触があり、この委員会のような場をさらに拡げていく方向性に誤りがないのではないかと確信を得ることができたように思います。

神奈川県立田奈高等学校 元校長

中田 正敏

「楽しいコトを意味あるコトに、意味あるコトを価値あるコトに」

ひきこもり等の対処型支援から、一部の支援者たちや支援団体は予防型支援に移行しようと試行錯誤を重ね、本報告冊子の隅々に感じられる“手応え”を現場では強く感じています。そして、私たちが発信する現場での“手応え”をキャッチして下さった方々が、私たちの活動の良き理解者となり、ご寄付を届けて下さったり、ボランティアとしてご参加下さっています。

私たちが取り組む「高校内居場所カフェ」は、事業の成果が確認されるまでに数年から数十年という長い時間を要すことは想像に難しくないでしょう。しかし、この気の遠くなるような支援が、今このタイミングで必要だということを直感的に理解して下さっている方々がいるからこそ、なんらかの関わりを持とうと、寄付やボランティアとして活動に参加して下さっているんだと思います。

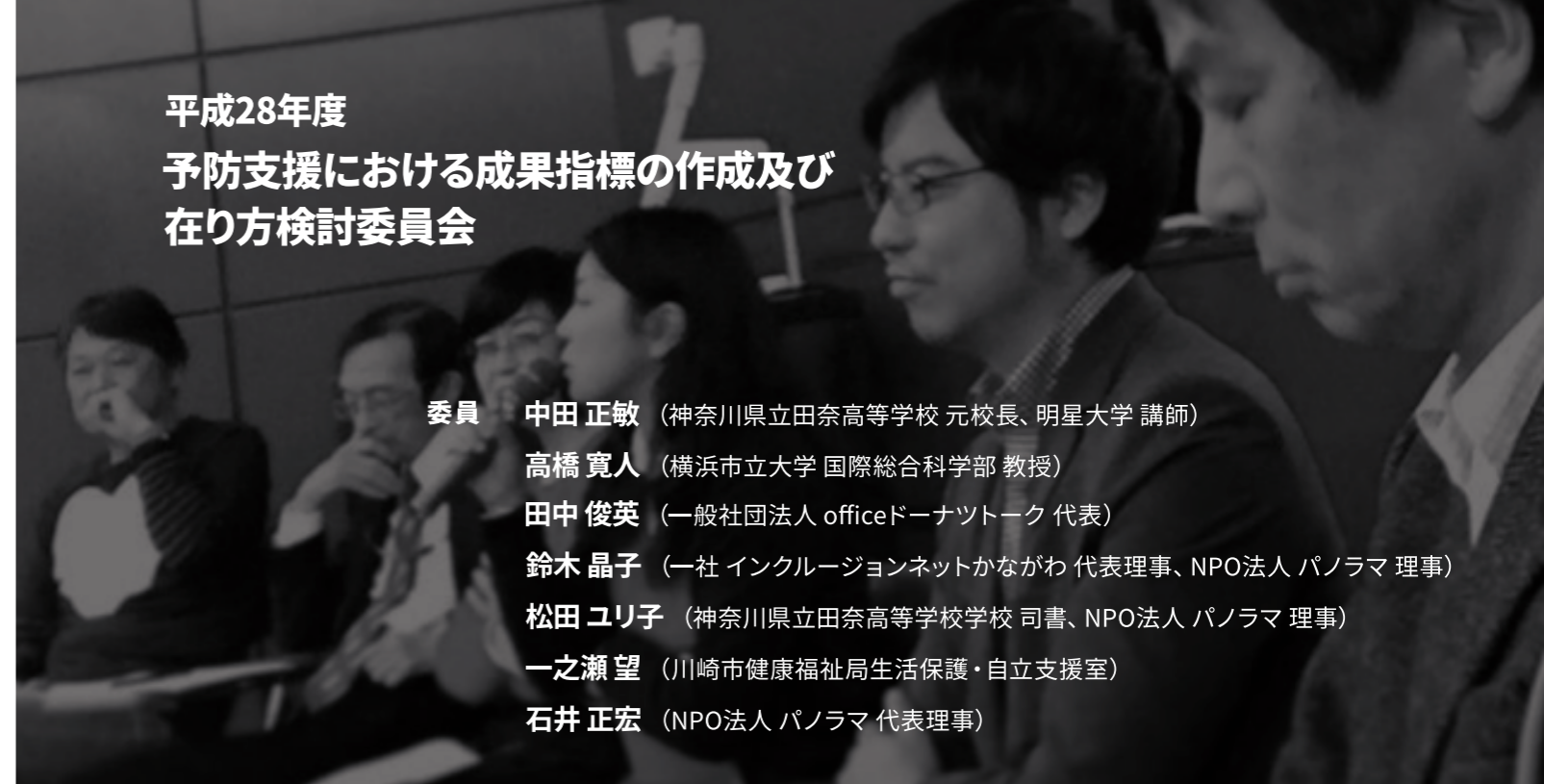
ではいったい、このような予防的な取り組みを、直感的に「なんか良さそう」という言葉だけで予算付けするわけにはいかない、行政をはじめとした様々なステークホルダーの方々に、どのようにこの「校内居場所カフェ」を評価していただくべきなのでしょうか？

本委員会の目的を象徴するような、鈴木委員の印象的な発言をここに紹介させていただきます。「(若者たちの)数十年先のことを考えて今これだけの税金を使います、と言える人がいったいどれだけいるのか?」。言える人がいないということなのですが、言える人の踏ん張りどころとなるエビデンスのあるデータを作ろうというのが本委員会の目的です。

現在、一般的な若者支援の委託事業等は、単年度の予算で資金提供を受けたNPO法人等が支援を実施し、年度内の効果を評価・測定し、それを成果として翌年度の資金提供を決定しています。しかしこれでは予防支援の成果は測りきれません。鈴木委員の言うように、数十年後を見据えた先行投資を決断するために必要な、今確認できる成果とはいったい何か? その指標とはどうあるべきなのか? 私たちはこの課題を検討・実践し、全国にシェアすることで、予防型支援の発展と継続に貢献したいと考え「成果指標委員会」を組織致しました。

和気藹々とした雰囲気の中での忌憚のない意見に、私自身、毎回大きな学びがありました。委員会で交わされた様々な言葉を、温度感を持って皆さまにお伝えしたく、座談会形式でお届けすることに致しましたので、是非最後までお楽しみ下さい。

NPO法人 パノラマ 代表理事
石井 正宏



平成28年度
予防支援における成果指標の作成及び
在り方検討委員会

- 委員 中田 正敏 (神奈川県立田奈高等学校 元校長、明星大学 講師)
- 高橋 寛人 (横浜市立大学 国際総合科学部 教授)
- 田中 俊英 (一般社団法人 officeドーナツトーク 代表)
- 鈴木 晶子 (一社 インクルージョンネットかながわ 代表理事、NPO法人 パノラマ 理事)
- 松田 ユリ子 (神奈川県立田奈高等学校 司書、NPO法人 パノラマ 理事)
- 一之瀬 望 (川崎市健康福祉局生活保護・自立支援室)
- 石井 正宏 (NPO法人 パノラマ 代表理事)

目次

- はじめに 神奈川県立田奈高等学校 元校長 中田正敏 ————— P 02
- 本委員会について NPO法人 パノラマ 代表理事 石井正宏 ————— P 03
- 平成28年度予防支援における成果指標の作成及び在り方検討委員会 — P 04
- 成果指標アンケート ————— P 05
- 委員自己紹介 ~シンポジウム・オープニングより~ ————— P 06~07
- < カフェのこと > ————— P 09
- < 友人のこと > ————— P 13
- < 先生のこと > ————— P 16
- < 学校のこと > ————— P 20
- < 地元などのこと > ————— P 23
- < 家族のこと > ————— P 26
- < 自分のこと > ————— P 28
- < 将来のこと > ————— P 30
- After Talk~あとがきに代えて~ ————— P 35

成果指標(Ver.03)

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

〈カフェのこと〉

1. カフェをよく利用している A・B・C・D・E
2. カフェで先生以外の大人と話す A・B・C・D・E
3. カフェのどこが好きですか？
a.食べ物や飲み物 b.おしゃべり c.音楽 d.雰囲気 e.誰かがいる
f.その他(その他に○をした人は自由記述欄)

〈先生のこと〉

1. 好きな先生がいる A・B・C・D・E
2. 先生とよく話す A・B・C・D・E
3. 先生は自分に関心を持ってきている A・B・C・D・E

〈学校のこと〉

1. 学校が楽しい A・B・C・D・E
2. 授業が楽しい A・B・C・D・E
3. 学校行事が楽しい(体育祭や文化祭など) A・B・C・D・E

〈地元などのこと〉

1. 地元などに学校外の友だちがいる A・B・C・D・E
2. 学校と家以外で相談できる大人がいる A・B・C・D・E

〈家族のこと〉

1. 家族と将来の話をする A・B・C・D・E
2. 家族と上手くやれている A・B・C・D・E
3. 家は安心できる場所である A・B・C・D・E
4. 親から愛されている・大切にされている A・B・C・D・E

〈自分のこと〉

1. 自分のことが好き A・B・C・D・E
2. 上手くいかないことにも意欲的に取り組める A・B・C・D・E

〈将来のこと〉

1. 高校は卒業したい A・B・C・D・E
2. 40歳になったとき幸せになっていると思う A・B・C・D・E

※本アンケートはご自由にお使いいただくことができますが、可能な範囲で結果の共有をお願い致します。
尚、生徒の記名等はカスタマイズしてお使い下さい。

委員自己紹介～シンポジウム・オープニングより～

石井 皆さんこんにちは。まずは自己紹介をお願いします。

田中 大阪でひきこもりの若者の支援を行う団体で10年間代表をやって、その最後の年に大阪府立西成高校で始めた地味な事業が校内居場所カフェの元祖となる「となりカフェ」でした。翌年にドーナツトークを立ち上げたんですが、あの頃、ひきこもりの源泉が高校にあるのではないかということ、次の若者支援の鍵を握るのが居場所カフェではないかということを感じていました。「ぴっかりカフェ」といっしょで、文化の提供とそのシェア、習慣を伝えることが大事だと考えています。貧困世帯の子たちとても価値感が狭いんですよね。言葉も荒っぽいし、酷い言葉が家中に飛び交ってるんです。これがひとつの文化としてあるわけですけど、そこを打破するのが文化の力だと思うんです。本人の文化の外にある大人と出会うこと、物と習慣によって違う文化を伝えていく、そんなことが大切だと思っています。

高橋 横浜市立大で教育学部の教員をしています。いつも言うんですけど、私はこの手の就労支援、貧困の専門家ではないんですが、私の研究よりもこちらの方が重要かと思って関わっています。それと校内居場所カフェということであると、昨年10月にオープンした横浜市立横浜総合高校の「ようこそカフェ」の立ち上げなどに関わっています。

一之瀬 私は川崎市の行政の人間で、普段は生活困窮者支援をしているんですが、昨年度、川崎市立川崎高校定時制でやってる「ぼちっとカフェ」の担当をしていた関係で石井さんから声をかけていただきました。「ぼちっとカフェ」は去年の4月から教育委員会の担当になっていますが、今は福祉と教育の連携事業等に関わっています。

鈴木 インクルージョンネットかながわで代表理事をしていて、パノラマの理事もさせてもらっている鈴木です。「ぴっかりカフェ」にも時々顔を出させていただいています。この委員会では冷水を浴びせるような役割になりそうですが、厳しいことを言う役目なのかなと思っています(笑)

松田 私は田奈高校で学校司書をしていて、パノラマの理事でもあります。予防支援の成果指標に関しては学校教育そのものの評価や、学校図書館というニッチなフィールドの評価にも応用できると思っています。とても難しいことですが、求められているなと感じています。

中田 世界史の教員を15年やって、行政で15年、平塚盲学校の校長の後に、今度神奈川県ではクリエイティブ・スクールというのを作るんだと遠目で見ているら、急遽、そのクリエイティブ・スクールである田奈高校で校長をやれと言われて、定年前の最後に田奈高校の校長を3年やりました。赴任した最初の挨拶で、生徒からは「自分の意思で学校に左遷で来たきたのか」という趣旨のことを言われたことをよく覚えています。今は大学で講義をやったり、障害のある学生の支援アドバイザーなど、いろいろなことをしています。現役時代の特技は「予算獲得」でした。

成果指標の確定、その前に...

【事務局より】以下の委員会でのやり取りは、シンポジウムと第6回の委員会を編集して作成しています。ここに辿り着くまでの各委員の発言は大変興味深く示唆に富んでおり、今後の予防支援を考える上で重要な記録になっていると思います。興味をお持ちいただいた方はパノラマのHPで、同じテイストで公開していますので、是非お読みください。(平成29年7月現在準備中)

石井 さて、本日はアンケートの設問を確定したいと思います。どうぞ、よろしくお願い致します。

松田 その前に、このアンケートの設問が行政向けの大人向けな文章構成にするのか、生徒たちが答えやすい生徒向けの文章構成にするのかを決めないとダメですよ。

石井 ここまで作ってきたVer.02はけっこう言葉が固めで、どちらかというと行政向けというか、大人っぽいんですよ。シンポジウムでもその辺突っ込みがありました。

一之瀬 行政的な視点ですけど。行政が数字を求めるとしたら、今の段階では生徒がどれくらいカフェを使っているのかという利用率がやっぱり欲しいですね。使われなければ意味がないので。あと、結局カフェには学校が大好きな生徒だけが来ているんじゃないかっていう意見に対して、そうじゃなくてカフェで足りない気持ちの部分埋められたり、友だちや地域の大人たちと話す機会があることが、学校への定着になっているんですよ、ということデータを取れるものになりたいと思いますね。

田中 例えば、「となりカフェ」を利用している生徒の中退率が1%で、学校全体では10%というときに、それが圧倒的に成果だと思うんです。そのときに先生たちは、そもそも辞めない生徒たちが来ているからと言うと思うんですけど、そこを突破するときの、もうひとつの論証が僕はこの成果指標

になると思ってるんです。そういった意味で、僕だったら誰が一番言いたいかと言えば先生たちですよ。これだけニーズがあるんですよ、というものにしたいですね。

石井 行政向けに求められる数字は、我々や学校側の客観的な観察で数字が出せたりする部分があるから、それを行政向けにして、その補足ができるものとして、生徒たちの気持ちに添うものにしていく、っていうのがいいんじゃないですかね？

松田 一之瀬さんがさっき言った行政向けの利用率と、カフェがあることによる生徒の変化率。この変化率が、カフェがあるのとないのどう違うんだってことを見せたいわけですよ？そこにカフェの存在意義を見出せるかって話だと思うんです。そこを上手く出せれば、生徒にとっても、学校にとっても存在意義があることになる、そこがポイントなのかなって思います。

田中 「びっくりカフェ」があるから田奈高校に入学したいって子たちがそろそろいるんじゃないですか？「となりカフェ」も、中学の先生に言われて入学したって生徒がいるって聞いてます。それが入学希望の動機になっているっていうのも大きいなって思ってるんですよ。

松田 います、います(笑)

石井 要するに、生徒たちにとって、カフェがどれだけ存在意義があるんだっていうことをもっと浮かび上がらせるものにした方がいいってことですよ。

田中 その方が、随意契約の複数年で活動していくときの説得力を持つと思いますよ。

石井 ということで、生徒の気持ちに添った言葉遣いで答えやすいもの、ということにして先に進みましょう。

〈カフェのこと〉

1. カフェをよく利用している A・B・C・D・E
2. カフェで先生以外の大人と話す A・B・C・D・E
3. カフェのどこが好きですか？好きなものに丸をして下さい。(複数可)
a.食べ物や飲み物 b.おしゃべり c.音楽 d.雰囲気 e.誰かがいる f.その他(自由回答)

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

EがCやBになることは人生が充実し豊かになること

石井 この設問はVer.02には入ってないんですけど、シンポジウムの参加者がもっとダイレクトにこういうことを訊いた方がいいという意見があり、その通りだなと思って入れることにしました。いかがでしょうか？

田中 いろいろなことが引き出せるように抽象的にしておくといいですね。

松田 自由記述があって、そこに書かれたことを分析の中でわかるようにしておく方がいいと思いますね。例えば、「居場所としてカフェが好き？」とか、そういう恣意的なことを生徒に答えさせたくないです。

田中 この質問は、カフェを利用している生徒の持っている基本的な価値観が表れるところですよ。その価値がどちらかという悲惨なものではなく、基本的には幸福に向かって行っているという絶望的なEではなく、ちょっとでもCやBに近づいていくってことが見えてくる。それは、人生が充実して豊かになっているということなんですよ。

石井 例えば今の「ぴっかりカフェ」に来ている1年のやんちゃな男子たちがカフェに来はじめた頃って、大人たちにいろいろ言われるし、うざいし、お菓子はもらえるけどあんまり楽しいなんて思ってたんじゃないですか。それが今では、先生が「今日はぴっかりカフェがあります」ってホームルームで言うと、「イエ〜イッ!」って大盛り上がりするらしいんですけど、これってEだったのがAにめっちゃ上がってるってことだよな(笑)

松田 そうですよ!(笑)。でも、先生たちは食べ物があるからじゃないかって思うわけ。

田中 食べ物があるだけでもいいじゃないですか、やっぱり衣食住が大変なんだから。しかもボランティアの方が用意してくれたものや寄付なんですよ。とてもいいことだと思いますよ。アンケートの各項目に前期で採った平均パーセンテージみたいなのがあって、前期に20%くらいだったものが、後期に採ったら35%に上がっていたとか、数字で見せられるようになっていると講演とかでわかりやすく伝えられますよね。

一之瀬 集計が大変そうですが...

田中 そこはマニアックな院生とかを使えばいいですよ(笑)。それと、何年生で何回くらい来ている生徒なのかを知りたいですね。何回かってことを採る意味は、恐らく年間で3回くらいしか来ない生徒たちっていうのは、あんまりポイントが上がっていかないと思うんです。逆に20回以上カフェに来ている常連の生徒たちはぐっと上がっていくという比較が恐らくできて、カフェの有効性をアピールできると思うんです。だから年間50回開催する意味があるんですよ、ということが委託元に言えるようになる。

石井 では、来店頻度を問う設問を入れましょう(問1)。

一之瀬 いやあ、これはけっこう集計に手間がかかると思うなあ...

田中 そこはマニアックな院生で(笑)

プロセス ~ポイントが下がるものにも成果が含まれる~

田中 でも、ここを丁寧にやると説得力が増しますから。分析できるのは2~3年後だとして、とりあえず取れるだけ取っておいたらいいんじゃないですか。でも、カフェにたくさん来ている生徒の方がポイントが上がらないってこともあったりして？

一之瀬 それって、予防支援に特化している「ぴっかりカフェ」と比較して、ソーシャルワークを中心とした「となりカフェ」の方がそうなる可能性は高いですよ。だって、もともとすぐに解決しないような問題を抱えている生徒が多く来るわけですから。

鈴木 どの設問でも言えることだと思うんですけど、例えば〈家族のこと〉なんかは、カフェを利用することで、「うちの家族ってなんかまずいのかも」とか、家族と会話がなかったことが当たり前だった生徒

が、うちってなんか上手くいっていないんだということに気づいてポイントが下がる可能性ってあると思うんですよ。

田中 それは十分ありえますますね。

鈴木 カフェで石井さんと話をして、「家に帰って親とちゃんと話してごらん」なんて提案があれば、そこで親と将来の対話が生まれるかもしれないし、カフェを通じて問題を発見すれば、スクール・ソーシャル・ワーカー（以下SSW）が入って家族との関係が変わるかもしれないですよ。

石井 ポイントが上がることに下がることに成果は見出せる。就労支援もそうだけど、働けたってことだけが成果じゃなくて、プロセスのなかでの変化に成果が含まれていて、その成果が次のフェーズで実るといって、対人援助ってそういうものなんだよね。

鈴木 そうなんですよ。そのフェーズが変わったときに、行政の縦割りを越えちゃうってことは現場ではよくありますよね。ポイントが下がることを成果として考えることも行政の方々には難しいだろうし、別の部署になった仕事を自分たちの成果とすることも委託事業だと難しくなっちゃうんですよ。

サードプレイスは「会う」ではなく「いる」なんです。

一之瀬 自由記述はどんな風にも書いてもらおうでしたっけ？

田中 カフェの何が楽しいものですね（問3）。多分、被りますよ。「友だちとおしゃべりが楽しい」とか、「ジュースがもらえる」とか「お菓子がもらえる」とか。でも、自分から自由記述は書きにくいから、ある程度は選択式にして、その他で自由記述っていう持っていき方がいいと思いますね。カフェに魅力があることを前提に、「カフェのどこが好きですか？」（問3）って聞いてちゃっていいと思いますよ。

松田 それいいですね、複数回答ありで。本が目当てっていうのも入れて欲しいな（笑）

石井 それだとぴっかり限定になっちゃうからダメでしょ。

一之瀬 「空間」とか「雰囲気」でいいんじゃないですか？

松田 「雰囲気」いいですね。選ぶ生徒は多いと思いますよ。あと、友だちが来ているから来てるっていう生徒が本当に多いですね。逆に、嫌いな友だちがいるからカフェに来ないっていう生徒もいますけど。

田中 そこはA君とかB君とか具体的な人ではなくて、なんか人がいるから来てるっていうのがサードプレイスなんですよ。だから「人がいる」とか、「誰かがいる」というのはいいと思います。

高橋 カフェに行けば誰かに会えるってということですか？

田中 ややこしいですけど、誰かが「いる」と「会える」はまた違うものなんですよ。

石井 「いる」は別に会えなくてもいいんですよ。

田中 そう、「いる」がサードプレイスなんですよ。話したくなければ話さなくてもいいのがサードプレイスだから。これはめっちゃ重要な問いですよ。

石井 じゃあ、「誰かがいる」にしましょう。あとは「その他」にして自由記述ということで。「カフェで先生以外の大人と話す」（問2）はこれでいいですか？「となりカフェ」には先生はいないわけだから、必ず行けばスタッフと話すわけですよ。「ぴっかりカフェ」の場合だと、話さずに帰ることもできちゃうっていうなかで大人と話しているというのが出ると、スタッフやボランティアさんとの会話を求めているというのが見える設問なのかなと思います。

松田 お菓子をもらう時によくボランティアさんたちと立ち話しているけど、あれは話すに入るんですか？

石井 そこは主観でいいんじゃないかな？（笑）

〈友人のこと〉

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 1. 学校に友だちがいる | A・B・C・D・E |
| 2. 相談のできる友だちがいる | A・B・C・D・E |
| 3. クラスや学年を越えて仲のいい友だちがいる | A・B・C・D・E |

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

逃げ場となる友だち関係のセーフティネットをカフェで作る

田中 「となりカフェ」で多いのは、カップルが揉め始めることなんです(苦笑)。大抵はどっちかの浮気というしょうもないもので、2人で解決したらいいのにカフェで恋愛争議が起きるんです、お互いの弁護士になる友だちが5人くらい手を挙げて。

一同 (笑)

田中 そこでは大人的な「まあまあ」が通用しない。切ないほど、友だちのことでほんとに一生懸命に生徒たちは考えるんです。恋愛関係を挟んだ時の友だち同士の盛り上がり感の凄まじさに、大人たちはヘトヘトになる。家庭以外の居場所は友達と恋人になるのかなと思いますね。

一之瀬 恋愛問題は「ぼちっとカフェ」でも一緒ですね。高校中退の理由は、彼氏・彼女のいざこざという人間関係に関するものがすごく多いんです。自分というものが確立できてはじめて、友人たちとの安定的な関係が持てるのに、不安定な中で自己同一化するもんだから、逃げられなくなってしまうんでしょうね。川崎定時の取組でも「カフェがなかったら、絶対しゃべってないヤツがいる」という話を聞いて、状況がひどくなった時にそこに逃げられる、もうひとつの友人関係が作れる場になっているのかと思います。

石井 それはとても重要な指摘ですね。中退予防の新たな着眼点だと思います。

鈴木 友だちへの思いや感情はとてもリアルなんだけど、SNSでのコミュニケーションがとっても稚拙で、ちょっとしたことで行き違いになってケンカにったりする。カフェの大人たちと出会うことで、「私たちの人間関係ってちょっと変？」という気づきの場になればいいと思いますね。こじれないように相談できる大人がいるというのは意味があると思います。

松田 高校生って、お昼休みをどう過ごすかっていうのが、すごい大きな課題なんですよ。一人でお弁当を食べないように常に気を使っているんですね。だから、なるべく大集団で食べることになるんですけど。カフェは人が多いので一人でいるのも目立たない。カフェにはそういう役割もあると思いますね。

中田 そういった、まだ友人関係が成立していないときに、カフェに行けば酸素が吸えてひと呼吸つくれるみたいな、そういう場所が学校には必要だし、カフェだけではなく、同時に様々な場が用意されていくことが必要ですね。

石井 まさに「溜め」ですよ。例えば、今年の1年生はほんと手がかかって、なんで3年が何も言わないんだらうって思っていたけど、今は肩とか組んじゃって仲が良かったりする。全校行事をきっかけにして「ぴっかりカフェ」でそういう関係が醸成されてるんですよ。さっき一之瀬さんが言った、もうひとつの関係って、「クラスや学年を越えた友人がいる」(問3)につながるものですよ。

ライトな友だちがディープな友だちになる居場所カフェ

松田 この間、生徒に「友だちが欲しい〜」って泣かれちゃって。でも、その生徒は決して友だちがいなくていいわけじゃないんですよ。

田中 客観的に見れば友だちがいなくていいわけじゃないのかもしれないけど、友だちがいるかいないかっていうのは主観的なものなんですよ。

石井 ここの問いは、交友関係の少なかった生徒が、カフェを利用することで交友関係がどのように広がったのか、ということを探りたい問いですよ。

松田 でも、この「学校に友だちがいる」(問1)っていう設問だと、どんな風に答えるんだろう？ Aの「とても」か、Eの「ぜんぜん」にしかならないような気がするんだけど。

石井 どちらもとも言えないって、けっこうあるような気がするけど。めっちゃ空気を読んで、その集団にいるだけの子っていますよ。

田中 うん、いる。

松田 それは友だちがいないんだよね？

田中 いないってことを認めたくないんですよ。

松田 ああ、一緒にいる人はいるんだ。でも、それを友だちと呼ぶかどうかは別ってことですね。そう言われれば、さっきの「友だちが欲しい〜」って泣いちゃった生徒もそんな感じですね。

一之瀬 問1の「学校に友だちがいる」と問2の「相談できる友だちがいる」の差異ってなんでしたっけ？ 厳密にいうと違うんですけど、ここで差を出す意味があるのかってというのがちょっと気になります。

高橋 問1を「学校に“仲のいい”友だちがいる」にすれば、問2はいらないと思うけど。

田中 学校に友だちがいて、さらにその中の誰かとは相談もできる。問2を活かそうと思ったら、“仲のいい”は入れずに、そのまま問2を残すべきですよ。

一之瀬 でもやっぱり、問2の「相談のできる友だちがいる」は、要らないかもしれないですね。というのは、カフェで人間関係の広がりがあったんですよって言うことは言えるとは思んですけど、なんかカフェで相談できる人をあてがうみたいなのって、なんか違うのかなって思うんですよ。

田中 いいじゃないですか、カフェが友だちを斡旋したって。

一之瀬 それだったらもうちょいライトに、「クラスや学年を越えて仲のいい友だちがいる」という問3が立証できればいいんじゃないですかね。別にディープな友だちを手に入れられるってことに踏み込む必要があるのかなって、ちょっと気になりました。

石井 ライトな友だち関係がディープな友だち関係に発展するっていうのは、カフェではよくあるけどね。相談のできる友だちがいなかった生徒が、相談のできる友だちをカフェで見つけて仲良くなる。教室ではしない話をカフェではしているってことがあるんですよ。

田中 「となりカフェ」を見ている、明らかにライトからディープになっていますよ。

〈先生のこと〉

- | | |
|---------------------|-----------|
| 1. 好きな先生がいる | A・B・C・D・E |
| 2. 先生とよく話す | A・B・C・D・E |
| 3. 先生は自分に興味を持ってきている | A・B・C・D・E |

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

学校の健康状態が浮かびあがる教師と生徒の関係性

中田 田奈高校の卒業式のことをちょっと話すと、式の中で生徒が勝手にマイクを持ってしゃべるコーナーがあるんですよ。「俺はこんな学校に来たくなかった。だけど田奈に入って本当によかった」とか言う。そうすると教員が泣いちゃうんですよ。これだけで、「次もなんかやろう」といういい話が教員からでてくるんですよ。

石井 僕も卒業式に出席させてもらっていますが、あれはけっこう感動的な場面ですよ。教師冥利に尽きるなって嫉妬する瞬間です。

中田 教員が学校のことを好きだと、生徒たちも学校を好きになるんだと思いますね。教員たちが学校や生徒のことを大事にしてくれるので安心して学校に来れるようになる。家庭的に厳しい状況があって、そのうえ学校で相手にしてもらえないというのはものすごくまずい状況ですよ。

田中 それが一番キツイ状況ですけど、日本中どこの学校にもよくある話ですよ。だから、校内居場所カフェが必要なわけなんですけど。すみません、先を続けてください。

中田 そういうキツイ状況で生命線になってくるのは、教員にいろんなことで気にかけてもらっていることだと思うんですよ。ただ教員にも限界があって、ものすごく疲れるんですよ。田奈高校のクリエイティブ1期生で40人ぐらいが辞めていたのが、その後2人まで中退者が減ったんですけど、そうすると、いろんな生徒が学校に残るわけですよ。

石井 ああ、そういうことですか。

中田 そう、正直一番困ったのは昔だったら自分から離れていったような大変な生徒が辞めずに残るわけですよ。だからこの仕事は大変なんです(苦笑)。様々な困難を抱えた生徒が大勢いるというのは、

教員だけではもう無理なわけ。そのために居場所カフェとか、いろんな装置が学校に必要なようになってくるんですよ。

高橋 「びっくりカフェ」の写真を見たときに、すごく先生と生徒が楽しそうだなと思ったんですね。とりわけ先生たちが楽しそうなんです。はっきり言って、教師って善良な人たちなんです。本当は、生徒とこういう関係を築きたいんじゃないかと思うんですよ、それがカフェがあることで実現できているんじゃないかな。

鈴木 私はSSWを1年やった経験があるんですけど、そこでは軽度の知的障害の生徒や、或いは問題行動を起こす生徒も多い学校で、特別指導も厳格にされていたし、警察が介入するケースなんかもあったんです。ある時、謹慎中の生徒と話しをしてくれと言われて話したんですけど、その生徒は先生には敬語を使わないのに、私には敬語を使うんですよ。なんでかなって思ったら「鈴木さんは先生じゃないから敬語なんです」って、でも先生にはタメ語だと(笑)

石井 面白いエピソードですね。「びっくりカフェ」でも、僕らにタメ口な生徒が台湾人のボランティアさんに、「日本に来て長いんですか？」と敬語を使って、なんだおまえ、敬語使えるんじゃないかと思ったりしました(笑)

鈴木 先生って、縦の関係のそれなりに影響力がある存在ですよ、だから反発するんだと思うんですよ。親子関係が上手くいかない生徒でも、教員との関係が良かった生徒は決定的に何かをもらっていると思うんです。とある市に研修に行ったんですけど、そこでは行きたくなる学校作りに取り組んでいて、その結果、中学の不登校を減らすことに成功しているんです。やっていることは学校が居場所になることで、結果として先生との関係もよくなっている。生徒たちって、すごく先生を見ているんですよ。

一之瀬 この設問で、カフェが媒介することで、生徒の先生への眼差しや関係性は変わるのかっていうことを浮かび上がらせるのが目的だっていうことですよ。

石井 「びっくりカフェ」を構想したときに、カフェが先生と生徒との出会い直しの場になればいいなと思ったんですよ。ギターが弾ける先生は、カフェにギターがあるとやっぱり弾きたがるんですよ。そうすると、「〇〇ギター弾けるんだ！」って生徒が驚くわけ。ここやっぱ呼び捨てなんですけど(笑)、先生の意外な一面を見つけることで、関係性に変化があるんじゃないかなって思いますね。

中田 教員に対して挑発気味に向かって来る生徒には何かがあるってということで、当時の田奈でよく言っていた言葉に「武装解除」っていうのがありました。相当なエネルギーを使ってタメ語で校長室へやって来たりするんですね。教員に接近することで何かを得たいという欲求を強烈に感じるわけ。これは他のタイプの高校とは違うんですよ。

松田 これだけ武装解除して、教員から見てもらえるということがすごく嬉しかったんだと思います。今までは教員から見てもらえなかった生徒たちだから。

Aが多いほど学校が居場所になれている

石井 「好きな先生」(問1)がいたら、「先生とよく話す」(問2)っていう風になるから、一緒にしちゃってもいいんじゃないでしょうか？

高橋 いや、積極的な生徒はどんどん話すけど、引っ込み思案な生徒は好きな先生がいても話せないから、好きな先生とよく話すとは限らないですよ。だから別れていていいと思いますよ。

松田 好きな先生と喋れない生徒っていますよ。

田中 「先生は自分に関心を持ってきている」(問3)っていうのは、「先生を信頼している」ということの違い換えですよ。質問としていいと思います。

松田 不満がある生徒たちって、ある生徒にだけ特別に接していて、自分は放って置かれていてズルっていう感じを持っているんですよ。

高橋 先生が自分に関心を持ってもらっているっていうことは、生徒にとってはものすごい重要なことで、名前とかあだ名を覚えてくれていたかがすごく大事なんですよ。逆に関心を持ってもらえてないからやんちゃなことをして、構ってもらおうとするわけだろうし。

松田 まさに！

石井 女子の名前を呼び間違えた時なんて最悪ですからね。「今なんて言った？もう一回言ってみ？」なんて言われて(苦笑)

高橋 自己肯定感が低いから、自分のことに興味を持ってくれるだけで嬉しいんでしょうね。カフェとの関連性が見えにくいけど、これは重要な質問ですよ。

石井 中田先生がさっき言った、学校経営が上手くいっていると、教員が生徒の話をよく聞くようになって中退者が減るっていう、そういう学校の健康状態のようなものが透けて見える質問だったりしますよね。いろんな学校でカフェをやったときに、ここが高い学校はカフェが上手く機能しているとか、ここが低い学校はカフェが上手く機能しないとか、そういう質問なのかなって思っています。

松田 これ、Aが多ければ多いほど学校が居場所になれているってことですよ。

石井 Aが多ければカフェへの理解者である先生も多くて、カフェへの促しもスムーズになっている可能性も高そうですね。逆にEが多くなってくると、「となりカフェ」的な逃げ場としてのカフェ機能が求められるとか、生徒のニーズが見えてくるかもしれませんね。

高橋 このデータが蓄積されていったときに、カフェの効果が下がっていった場合に、ここが下がっているからだってことが言えるかもしれなませんね。

石井 なるほど～。

松田 カフェが悪いわけじゃないんだよって(笑)

高橋 そうそう(笑)

松田 でも本当にそう。カフェだけで何かができるわけじゃないですもん。

〈学校のこと〉

- | | |
|-------------|-----------|
| 1. 学校が楽しい | A・B・C・D・E |
| 2. 授業が楽しい | A・B・C・D・E |
| 3. 学校行事が楽しい | A・B・C・D・E |

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

困った生徒は、困っている生徒である

中田 これは実際に教員が言った言葉なんですけど、「うちの生徒は話しをしないとわからない。見かけだけで判断すると大変なことになる」と。これこそが「困った生徒」から「困っている生徒」としての発見の第一歩であり、教員たちが目の前の生徒を「困っている」という視点で見えていくことに移り変わっていくということなんですよ。

石井 困った生徒は困っている生徒。名言だと思います。

中田 対話を通して、生徒も自分たちのことを教員がわかってきていると思うようになってくる。すなわち、生徒たちが話を聞いてもらえる環境、ここが一番大事なんです。生徒を理解している教員が増え、授業を工夫したり、学校行事をどうするかと教員が自然に考えるようになってくる。そうすると生徒たちは学校が楽しくなるわけ。つまり、教員たちが生徒の話を聞くと生徒を理解する教員が増え、そうやって話をするだけで退学率は下がるんです。話を聞いてくれる大人がいる、やるべき最初のことはそういうシンプルなことなんです。ある田奈高校の教員が面白いことを言っていました。「校長、うちの生徒たちはまるで固いせんべいですよ。最初は歯が立たない。だけど噛んでいくうちにやみつきになる」って(笑)

松田 学校に行くのが楽しい(問1)というのは究極の問いだと思いますね。これがあつたら、ほかのことはもう大丈夫。例えば、文字を読むのが難しい障害を持っている生徒がいて、本人はそれに気づいてなくて、なんでつらいのかわからない。そういう生徒が学習を楽しいと思えるはずがないですよ。だけど、なんらかの工夫を教師がして授業が楽しくなれば、学校は楽しくなりますよね。わかったって思える手応えのある経験を作れることが、とても大事だと思います。

中田 教師が自分をきちっと認めてくれていると思えることが欠かせないですよ。カフェがあり、

そのことで生徒指導が上手くいくことはあると思う。この子たちにはこういう環境を作っていかな
いといけないということが教員の意識に生まれると、教員が熱心になるんじゃないかな。生徒指
導は生徒たちが自分たちのまずいところを、実は自分で見つける作業なんですよ。いろんな大人
と出会い、自分の良さを認めてもらえている生徒の方が、生徒指導には上手く乗るんですよ。

石井 承認の欲求が満たされている方が、生徒への指導が入るってことですね。

松田 田奈高校は、図書館や「ぴっかりカフェ」を居場所にしなくても、学校そのものを居場所にするよ
うにできたんです。だから、学校そのものが居場所になることが重要なことだと思います。

石井 横浜総合高校で「ようこそカフェ」ができた時、生徒の1人が「横総、本気じゃん!」って言ったらし
いんです(笑)。学校の中に無料で楽しめるカフェができていて、そういうことを許していることが、
生徒たちに対して、学校の構えをアピールする何かがあるんだと思いますね。

田中 静かなはずの図書館でロックンロールをガンガン流すとかね。

石井 そうそう(笑)。田奈高校の1年生のお母さんが言っていたんだけど、なかなか学校の準備をせず
に行きたがらなかった子が、ふと、「あ、今日はぴっかりカフェだ」と言って、ぱっぱと準備して登校
したそうです(笑)

松田 それ最高!学校から気持ちが離れそうな生徒を学校につなぎとめているって機能はあるような気
がしますね。

石井 学校から気持ちが離れているかどうかを上手に聞く質問って、なにかないんですかね?

松田 それが「学校の中に居場所がある」(最終的に削除された設問)という設問になると思いますよ。
気持ちを聞くじゃなくて、こういうことを聞くのはいいですよ。

一之瀬 でも、「学校の中に居場所がある」って、居場所がない生徒にとっては、けっこう胸にグサッと来る
設問じゃないですか?(苦笑)

松田 確かに。学校に居場所がなかったら、学校が楽しいわけないんだから、「学校が楽しい」(問1)に
集約しちゃっていいんじゃないでしょうか。そして、「居場所」って言い方を生徒はしないから、そう
いう聞き方はしない方がいいと思います。

田中 生徒たちの話を聞いていると、学校が楽しいもそうなんですけど、大概是「友人」に話題は絞られ
て、それ以外は「友人」の言い換えのバリエーションなんですよ。「学校が楽しい」っていうのは、学
校に行ったら友だちに会うのが楽しいってことが言いたいんですよ。

松田 そう、みんな友だちに会いに来てるんですよ、学校って。あるいは、友だちが嫌だから学校に來れ
ないっていうものもある。だから、質問の順番のことを言うなら、教職員よりも友人の方が順番は先
なんですよ。〈カフェのこと〉を訊いて、〈友人のこと〉を訊いて、〈先生のこと〉を訊いて、〈学校のこ
と〉を訊いて、〈地域のこと〉を訊いて、〈家族のこと〉を最後に訊くって順番がいいと思う。〈自
分のこと〉と〈将来のこと〉はひとつにまとめられないかな?

田中 いや、高校生にとって、自分と将来は一緒じゃないですよ。将来は遙か先にあって、自分とはあん
まり関係のないことなんですよ。

松田 あ〜、そうかあ。

〈地元などのこと〉

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1. 地元など学校以外の友だちがいる | A・B・C・D・E |
| 2. 学校と家以外で相談できる大人がいる | A・B・C・D・E |

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

姿なき生徒を地域につなぐ校内居場所カフェ

中田 「相談できる場所が地域にあることを知っている」(最終的に削除)という設問だけど、実際、校長やっつてるときに、就職に失敗したら、もうどこにもいけないという気になる生徒が必ずいるわけですね。そういう卒業生が何かあると、彼らはハローワークではなく学校に相談に来るんです。そこで、だったら学校にハローワークのような中継地点を作って、そこから彼らを実社会につなげられるようにと考えたんですよ。残念ながら、退職してしまい構想で終わってますが(笑)。でも、カフェの中にそういう機能を作ることもそうだし、外部機関が学校の中にもいることも、生徒と地域をつなげることだと思いますね。

鈴木 地域からの視点ですけど、高校って学区がないから地域からは全然見えないんですよ。その見えていない高校を中退すると、今度は社会から見えなくなってしまう。実際、田奈高校には地元の子はあんまり来ていませんよね。その意味でも、高校生の年齢は地域から隔絶された存在に構造的になりやすいところがあるんですよ。

石井 都立の定時制高校の学校評議委員をしていたことがあるけど、地域の代表みたいな方が、知らない子だからゴミのポイ捨ても注意できないって言ってましたね。

鈴木 ですよ。だから、地域の人が学校内にあるカフェに入って来るっていうのは実はすごい大きいことだと思います。学校にいながら地域の情報を知ることできて、卒業してからつながることもできるなんて、本当にすごいことですよ。

石井 知らないということで、不要な不安を掻き立てたりもしますよね。金髪というだけで怖いとか。石井さんは怖くないんですかって聞かれたことがあります(苦笑)

鈴木 地域の人たちからすれば、高校生のよくわからないやんちゃな子たちが、居場所もなくウロウロし

ていると怖いとか、迷惑な存在だと思われてしまいますよね。でも、こうやって「ぴっかりカフェ」なんかで実際に付き合っていくと、案外可愛い子たちなんだと思う大人が地域が増えていくと思うんです。そういうことが大事で、価値のあることなんだと思います。

石井 初めから狙っていたわけじゃないけど、居場所カフェを高校が開くということは、結果として学校が地域とのインターフェイスを持つことになるんだということをじわじわと感じていますね。よく、「学校をプラットフォームにした支援」なんていう言い方があるけど、校内居場所カフェはそれを実現するひとつの方法だと確信しています。

田中 「サポステに来て」といっても生徒は行動範囲も狭いしお金もないので行けないんですよ。こっちへ来てくれと言っても来れない。でも、居場所カフェで待っているっていうのは、生徒にとって本当に来やすいんですよ。

石井 支援者が学校にアウトリーチをしに行っているというのは、まさにその部分ですよ。ここの部分はもっと強調して伝えていきたいなあ。

高校生にとってのサードプレイス「地元」

一之瀬 ここって、そんなに「地元」でいきますか？これは個人的な経験なんですけど、高校生のときに引越したんですよ。だから地元には全然友だちがいなかったんですよ。中学校の時の地元はあるけど、別にそこには行かないですし…。

田中 サードプレイスのない高校時代だったんだ？

一之瀬 いや、他の高校の仲間とバンドとか組んでいたんで、サードプレイス的な行くところはあったんですよ。だから、地元かって言われたら地元じゃないんですよ。

松田 それなら「地元“など”学校外に友だちがいる」(問1)にしたらいんじゃないですか？

田中 いいですね、「地元」ってわかりやすく、いいキーワードですよ。僕は地元がめっちゃ嫌いな高校生でしたけど(苦笑)。

松田 だったら、「学校と家以外で相談のできる大人がいる」(問2)でいいんじゃないですか。

田中 それでいいじゃないですか。「となりカフェ」を利用している生徒たちが、ドーナツトークの別のイベントの手伝いをしたり、ホームレスのおっちゃん和西成区のイベントと一緒に野菜を売ったり、「となりカフェ」を中心とした関係性が生まれていってますよ。

松田 それ、素敵ですね!

田中 「あの子なら手伝ってくれると違うか?」とスタッフが声をかけると、「野菜売るの手伝うで〜」とか生徒が言うんです。「手伝ったらキャベツあげるで」「それうれしいな」となる(笑)

一同 (笑)

田中 地域と密着していくと、そういう流れが自然と生まれて、徐々に世界が広がっていくのが居場所カフェのメリットだと思います。

石井 「ぴっかりカフェ」でも、いつも手伝いに来てくれる地元のNPO法人の方たちが、フェアトレードの洋服でファッションショーをやるから、誰かモデルになってくれないかって生徒に言ったら、三人の女子生徒がモデルをやって、ランウェイを市民の拍手を浴びて歩いたんです。そうしたら、自分たちも文化祭でファッションショーをやりたいということになって、地域のNPO法人の方にミシンを借りに行き教わったり、文化祭に地域の方が応援に来てくれたりして、感動して泣いてましたね。

田中 いい話ですね。

石井 「となりカフェ」ではあるかわからないけど、ぴっかりだと卒後に、僕が相談員をやっている横浜市の居場所事業につながったりしているんですよ。ドーナツが運営している相談機関に卒業生がつかっていくとかあってあったりするんじゃないですか?

田中 ありますね。この問いは、学校と家以外に居場所がないということを明らかにするためにはいい質問かもしれませんね。だから、学校の中に居場所を作るしかないんだという感じで。多分地域って、DとかEばかりになると思うんですよ、サードプレイスがない生徒が多いんですよ。

〈家族のこと〉

1. 家族と将来の話をする	A・B・C・D・E
2. 家族と上手くやれている	A・B・C・D・E
3. 家は安心できる場所である	A・B・C・D・E
4. 親から愛されている・大切にされている	A・B・C・D・E

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

家族関係はカフェを利用することでどう変わっていくのか?

田中 この問いを生徒に投げかけて点数が上がってくれば、カフェの成果があったと言えますよね。ひとつ一つの項目に絞り込んで、点数が上がっていくことでカフェの存在意義があると行政に伝えることはできると思います。

鈴木 家族関係の在り方っていうところではどうなのでしょうね?

田中 そこなんです。困難校では、家族と言っても実の父・母を発見する方が難しかったりするから。例えば、シングルマザーの新しい恋人だった彼氏が父になったり、義理の父が連れてきた血の繋がらない兄とか、新たに生まれたステップファミリーみたいな、複雑な家庭の子どもがまったく珍しくないわけです。だからこそ、そんな環境の中で、この数字が上がっていくことにはすごく意味があると思います。

松田 カフェをやったからといって家族関係が変わるものではないと思うんです。ただ、生徒がぼろっと開示する、「うち、こうなんだよ」という、それって大丈夫なのかなっていう違和感をカフェができたことによって拾いやすくなっていて、そのことを担任など次につないでいくことができるようになったんですよ。すぐに家族と上手くいくことにはならないけれど、カフェから支援の道筋をつけることはできると思います。

田中 生徒たちは、本当に親が酷い言葉を使うと言うんです。言っちゃなんだけど、実際大変な親が多いですよ。しかし、その親にも事情があるんです。母親自身も虐待サバイバー(元当事者)で、18歳で生徒のことを産んでいるので、母親の年齢も若いんですね。30代半ばというのが珍しくないですよ。そんな環境で、子どもたちはサバイバルしながら生きている。そんな環境で育っているのに、それでも母親を愛しているんですよ。そんな中でこの問いがどういう結果になるのか? とても気になりますよね。

一之瀬 家庭なり学校なりで、生きづらさを感じている生徒たちがカフェを拠点にしているんだと思うんですね。生活保護世帯のお子さんで定時制高校に通う子たちの中退率が高いんですけど、これは家庭の問題がやはり大きいと思うんです。居場所カフェは、そうした学校の外の課題を発見する機能を持つんだらうと思います。

石井 子供が安定すると、親も安定するというのがあるんじゃないかな？っていうのがひとつ仮説として考えていて。ボランティアさんに話を聞いてもらうなど、親でも先生でもない大人に何かを吐き出すことが、家庭での安定につながるというのも実はあるのではないかと考えています。その辺を数値として採るのはすごく難しいことだけど、なんらかの形で見えてくると面白いですよ。

田中 この設問はよくできてますよね。このままでいいんじゃないですか？

一同 (納得)

石井 じゃあ、このまま採用にしましょう。

〈自分のこと〉

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 1. 自分のことが好き | A・B・C・D・E |
| 2. 上手くいかないことにも意欲的に取り組める | A・B・C・D・E |

A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく

承認の場であるカフェが自己肯定感を育む

石井 「ぴっかりカフェ」には、毎回カップにイラストを描いて持って来る生徒がいるんですよ。ボランティアさんたちには有名な生徒で、カップに絵を描くと写真を撮らせてと寄ってくる(笑)。そういう承認欲求を満たす感じが、自己肯定感を持ち上げることになるんだと思います。カフェの場って、承認される機会がものすごくたくさんあるんですよ。

鈴木 そうなると、「自分のことが好き」(問1)が上がっていくかもしれませんね。

高橋 子どもが自己肯定感を持つということの大切さって、例えば自分に何かあった時、親は嘆き悲しむとか、部活の友達に悲しむとか。自分を大切に思えるのは、周りが大切に思ってくれているからであって、周りから大切にされているからこそ自分を大切に思えるわけですよ。仮に、周囲に大切にされてなかった子たちが、カフェに来て名前を覚えてもらえるということがあったら、それはすごく嬉しいことだと思います。

田中 困難高校であればあるほど、これまで自分が肯定されないまま来ているので、自分というものの確立が揺らいでいることが多いですよ。だから自分を愛したり、自分がこのままここにいていいと考える癖がないんです。つまり、自己承認ができない15年間に生徒たちにはあるんですよ。スタッフやボランティアが来てよかったねとカフェに歓迎する。そういう世界にいなかった生徒が、こっち側の世界に入ること承認のメカニズムに放り込まれる。その意味はとても大きいですよ。

松田 先生と上手くいってない生徒が常連になることが多いですね。そういう生徒がカフェを利用すると、承認される機会が多いから、表情が変わっていくような感じがします。

自分に満足してますか？「え〜!？」ってなっちゃうよ!

石井 この〈自分のこと〉って、内閣府の類似アンケート(子供・若者白書)と同じものにして、一般と困難

校の生徒との比較ができるような見せ方にしようというのが、これまでのコンセプトだったんですけど、今回の生徒の気持ちに添ったというまとめ方になると、見直してもいいのかと思うんですけど、どうでしょうか？

松田 初期的な議論から、シンポジウムを経て、今日の方針からすると、今までの、「自分自身に満足している」(仮問1)などは、ちょっとテイストが変わってきてますよね。

石井 「自分に満足してますか」(問1の原型)っていうのもけっこうキツくないですか？

松田 そんなこと訊かれたら「え〜?!」って今でもなっちゃう(苦笑)

田中 でも、アンケートとしてはいいと思いますけどね。

石井 もうちょい、生徒よりな言い方に直すと「自分のことは好きですか？」(問1)って感じじゃないかな？

松田 ああ、それいいですね、それでいきましょう!

石井 では、決定で。「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」(仮問3)はどうでしょう？

高橋 内閣府のデータと比較すると、困難校とか課題集中校と言われているような高校の生徒たちの自己肯定感が歴然と低いことが証明される。だから居場所カフェ的なものが必要なんだということになるんじゃないですかね？ やっぱり予算獲得するにしても「困っている人」を助けるためっていうのは予算もつきやすいわけだから。

石井 本当は丁寧にグループ・インタビューとかして、検証する部分なんでしょうね。

松田 〈友だちのこと〉など、他の設問で間接的に訊けてるものもあるので要らないんじゃないですか？なるべく設問が多くならない方がいいですよ。

石井 「仲のいい友だちがいる」生徒たちは、人間関係のトラブルを解決できているっていうことですよ。ということで、仮問1アレンジと仮問3を残すということでいいですね。

〈将来のこと〉

- | | |
|---|-----------|
| 1. 高校は卒業したい | A・B・C・D・E |
| 2. 40歳になったとき幸せになっていると思う | A・B・C・D・E |
| A...とても B...まあまあ C...どちらでもない D...あまり E...まったく | |

親とは違う生き方、違う世界があることをカフェで知る

田中 課題集中校には、将来のロールモデルがないところで育てている子どもが多いので、10年後にこうなりたいという大人を描きにくいわけです。だから、愛や居場所を求めているんですよ。「将来って私も考えてみてもいいんだ」と思えるようになることが大事ですよ。自分、あるいは将来がない若者が現にいるということを知って欲しい。

鈴木 そのロールモデルがないということについてはですけど、私がSSWをしていたときに、妊娠してしまった女性生徒が中絶して学校に残るという選択をしたんですけど、その最終判断は親なんですよね。一方で、妊娠で学校を辞めた女子生徒は、親に「自分もそうだったから産みなさい」と、元ヤンのお母さんが言うわけです。お母さんの時は、それで何とかやってこれたかもしれないけれど、今の時代だとちょっと厳しいですよ。母親とは違う世界と違う生き方があるって、子供を産むのは今ではない、或いはちゃんと避妊をするという選択を、カフェは用意できるのかもしれないなって思います。

一之瀬 例えば生活保護世帯を考えると、5%の生徒たちが毎年中退していくので最終的に3年間で15%の生徒が中退する。一般の高校生だと1~1.5%。個人的な意見ですが、中退率を減らすというのは、その子たちの経済的な側面に確実に影響を与えることだと思います。

高橋 どの学会も、今は貧困問題を取り上げていますね。一之瀬さんが言うように、生活の問題、つまり経済をなんとかしないと、教育学だけでは解決しきれない問題なんです。こうした貧困の解決は先生にはできないわけです。子どもや若者の支援者はじめ、いろんな人がいろんな形で関わる必要がある。そういう人たちが知り合い、横のつながりが校内居場所カフェからは生まれる可能性が広がることに希望を感じています。カフェ形式だと地域の様々な人たちが参加しやすく、地域のつながりもできますよね。

石井 ちょっと整理すると、独自アンケートの項目として、「高校はちゃんと卒業するべきだ」(仮問1)

があり、内閣府のアンケートを参照して、「将来は就職し仕事を続けられる」(仮問2)と「40歳になったとき幸せになっていると思う」(仮問3)という設問になっているんだけど。まず「高校はちゃんと卒業するべきだ」ですが、みんなこの問いには「そう思う」って答えるんじゃないのかな？

松田 この質問の意図はどこにあるんですって？

石井 中退しようかなと、学校から気持ちが離れていたけど、カフェでいろいろな大人と話すうちに社会への期待感が高まって、卒業への意識が高まるのではないか、それが中退予防になっていますよ、つまりカフェで卒業へのモチベーション付けができていますよっていうのが狙いですね。

田中 なるほど。でもちょっと恣意的だから、「ちゃんと」はとったらいいんじゃないですか？ それと「べきだ」というのもちょっと。気持ちを問いたいわけだから、「高校は卒業したい」(問1)でいいんじゃないですか？

松田 そうですね、人がどう思うかじゃなくて、自分がどう思うかっていうことですよ。これは〈学校のこと〉に入れちゃっていいんじゃないですか？

田中 いや、これは将来の学歴を問う設問で、学歴があった方が将来有利になるということを生徒が思っているかということなので、やっぱり〈自分のこと〉なんですよ。

石井 「将来は就職し、仕事を続けられる」や「40歳のときに幸せになっていると思う」っていうのも、もはや違ってきていないかな？

田中 これは就職したいと、仕事を続けたいという2種類の質問が入っていて、もう少しシンプルにしないと答えにくいですよ。あるいはふたつに分けるとか。

石井 カフェの目的を考えると、働くとか社会に出るモチベーション付けをしたいわけだから、仕事を続けることよりも、就職したい方に寄せた方がいいと思う。そうすると「将来は就職したい」になるのかな？ でも、さっきの卒業と同じで、働かなきゃいけないということはみんな重々承知なんですけどね。

～働きたくなかった高校時代の思い出話に花が咲き収集がつかなくなる～

一之瀬 結局そのお～、将来、自分が働けるかどうかよくわからない状態で不安だったけど、カフェで身近な大人たちから仕事の話とかも聞けたりして、仕事に対するビジョンみたいなものが見えてくるということですよ。

田中 働くことの敷居が低くなるんですよ。僕とか石井さんみたいな変な大人を見て、こんな大人でもいいんだと。

一之瀬 そうすると、「将来仕事が続けられる」みたいに、ここまできちんと問わなくてもいいような気がします。「卒後のイメージを持っている」とか。

田中 ああ、それくらいが丁度いいですよ。

高橋 多分、ひきこもりとか、フリーターとか、将来のイメージってポジティブなものとは限らなくて、けっこうネガティブなんじゃないんですか？ そういうネガティブな気持ちがカフェによってポジティブにどう変換していくのかっていうのが見れたらいいですけど。

松田 だったら、内閣府の通りに「40歳のときに幸せになっていると思う」でいいんじゃないですか？

石井 う～ん、なかなかよくできてますね、内閣府。仮にこれでいくとして年齢は40歳でいいんですか？ 40歳は遠すぎてイメージできないから、30歳くらいとか？

一之瀬 いや、でもこれは完全に内閣府の白書とリンクした質問なんで、本当に30にしちゃいますか？ ちなみに内閣府の「40歳で幸せになっていると思う」が、66.2%らしいですよ。対象は13歳から29歳です。

高橋 29歳が入っているから30歳は訊けなくて40歳にしているんでしょう(笑)

石井 でも、高校生の親世代が40代だから、40歳がイメージしやすくていいかもしれませんね。

一同 ああ、そうですね(同意)

一之瀬 アンケートの最後に、なんでもいいので自由記述を入れたいと思うんですけど、どうでしょうか？「ぼちっと」の自由記述がけっこういい感じで予想外に絵とかイラストとか描いてくれたりするんですよ。

石井 一番最後に、その他何か書きたいことをご自由にどうぞ、イラストでも落書きでも要望でもなんでもいいですよってするのがいいんじゃないですか？

松田 ぜったい「〇〇を入れて！」っていうドリンクのリクエストとか来ますよ(笑)。書ききれなかったら裏面もどうぞっておきましょう。

石井 「カフェはうるさくて本当は嫌い。でもお菓子がタダでもらえるから来てるだけ」みたいなものとかも、お腹の空き具合が見えてきていいですね。

高校生の「どちらとも言えない」問題

石井 これでアンケートはとりあえず完成させられそうですが、「A...とても思う、B...まあまあそう思う、C...どちらとも言えない、D...あまりそう思わない、E...まったく思わない」というのはこれでいいんでしょうかね？

一之瀬 ちなみに内閣府のアンケートには、「どちらとも言えない」がないですね。

石井 どちらかに振り分けたいから、「どちらとも言えない」をカットしているんだろうけど、「どちらとも言えない」を読み取るのってけっこう面白いと思うんですけどね。

田中 高校生って「どちらとも言えない」が多いですよ、多分。

石井 「(C)どちらとも言えない」と回答していた生徒が、カフェの利用によって、BとかDに移るっていうのが分析として面白いと思うんですよ。

田中 だから、あった方がいいと思います。虚しいんですよ、高校生って。

石井 それは主観だよ(笑)

田中 その虚しさを表すのが「どちらとも言えない」なんですよ。僕だったら全部Cですよ、白けきってて虚しいから(苦笑)

松田 (笑)あと、「まあまあそう思う」じゃなくて「思う」を取って「まあまあ」と、「あまり」とか「ぜんぜん」でいいと思う。だから、Aが「とても」、Bが「まあまあ」、Cが「どちらでもない」にして、Dが「あまり」、Eが「ぜんぜん」とかでどうですか？

一之瀬 「どちらでもない」って、何と何でどちらでもないってなるんですかね？多分、流れる的にはCは「ふつう」になると思うんです。でも、そうすると「わからない」を足さないといけないから面倒くさくなっちゃうんですけどね。

松田 ああ、確かに。でも、わからないとき「ふつう」って言わない？(笑)

田中 でも「ふつう」は難しいですよ、価値判断として。だから、「どちらでもない」でいいんじゃないですか？ 何度かこのアンケートを採ったときに、年度始めはまだ白けてて、「どちらでもない」というのが多くなるんです。でも、だんだんこのアンケートに真剣に答えるようになって、BかDに振られていくんですよ。そういうのが数字として見えてくるとすごく面白いものになると思いますね。

松田 それと、「ぜんぜん」より、「まったく」の方がいいかもしれません。だって、「ぜんぜんいいよ！」っていう言い方を生徒はするから。

石井 では「まったく」にしましょう。

After Talk ～あとがきに代えて～

石井 僕はこの委員会の議事録を作ったり、こうして文章にまとめていく過程で、校内居場所カフェとはなんぞやということに対して、理論武装が完璧になっていく感じがすごかったです。カフェを語るポキャブラリーを皆さんからたくさんもらったなって感じがしています。毎回の懇親会でも癒されたり、モチベーションをもらったりしました。本当にありがとうございます。

一之瀬 今年一年というのは理論とか基礎の部分が議論された会だったと思っています。これが報告書としてまとめると面白いものになるだろうなっていう期待感を今は持っていますね。あとはやっぱり、いつも行政的な視点で自分の分野にこだわって見てしまいがちなんですけど、この委員会では分野の違う話がたくさん聞けて面白かったです。ありがとうございました。

高橋 さっき、すごく自覚したんですけど、ここに集まってる人ってみんな発言していくタイプの人で、発信者なんですよ。これから居場所カフェというものをどんどんアピールして広めていきたいわけですけど、検索すると大阪や横浜、川崎のカフェがすでにいっぱい出てくるわけですよ。そんなのを見ていると、これはもうカフェをやった方がいいんじゃないかっていう感じになってくるんですけど、居場所カフェってというのは、働きかける力があるんだなって思いますし、発信こそが重要だし、この委員会の意味だろうなってことを自覚しました。

田中 そう！発信が重要なんですよ。発信していないとすぐに忘れられますんで。

高橋 いい指標を作ることが目的で、あれも言わなくちゃ、これも言わなくちゃと思うんだけど、今日も議論していく中で、カフェをやっているうちにカフェが学校化しちゃうとか、そういう居場所が何十箇所できてあんまり意味がないとかって議論になるじゃないですか、そういうことを発信していくことの重要さですよ。

田中 今年はこの委員会に参加できて良かったと思っています。「となりカフェ」をはじめて最初の1～2年は、これがどうなるんだろうなって不安だったんです。まあ、直感的にいけるなあとは感じていたんですけど。僕は昔、医療関係のジャーナリストをやって、その頃から教育へのアプローチって重要だと思っていたので、なんらかの形でできないかと思うって思っていました。僕自身が暗黒の高校生時代を送って、なんとかならんのか日本の教育はっていうのを17歳の僕は思っていました。

石井 時間がないので手短かにお願いします。

田中 あ、はい。これまで自分なりに記事を書いたり支援をしたりカウンセリングしたりたくさんやってきたんですけど、5年前の直感は正しくて、ついに大阪では居場所カフェに教育委員会予算がついたんです。これはかなりの達成感がありますね。さらに良かったのは、定期的にこうやって横浜に来させてもらうことで、5年前には1から説明しなければならなかったことが、ここでは基礎的な土台が共有されていますので、非常に楽で、これからどうするかって議論がすぐにできたわけですけど、これはまさに「居場所カフェ2.0」になったなあ、という風に思っています。高橋先生もおっしゃってましたけど、これをいかに発信していくか。たまたま僕と石井さんは発信系の支援者で、SNSの発展に合わせて上手く発信してきましたけど、これをさらに我々単体の発信ではなく、面として発信していくための題材として、この議論は使えると思っています。

高橋 補足なんですけど。この居場所カフェってアメリカの理論に基づいてやっているとじゃなくて、皆さんの実践に基づいているじゃないですか、それが特色だと思うんですよ。

田中 うちのスタッフの、学校の中にスターバックスを作りたいみたいな、すごい単純で可愛い欲望からはじめて(笑)、壁紙やテーブルクロスを百均で買って、学校に入ってみたら虐待だとかへビーなケースにどんどん巻き込まれていって、たまたまそのスタッフが精神保健福祉士とか持ってたから頑張ってケースワークをはじめて。すごい大変だったんですけど、それを補うほどのすごい収穫があって、僕も居場所カフェからは学ばせてもらってますね。

石井 そんな感じだったんだ(笑)。

田中 すごく偶然の一致がいろいろな形で重なって、丁度石井さんもカフェを横浜ではじめて。あの頃、内閣府の委員会で僕らはちょくちょく会ってたけど、何の議論もいちいちすることなしに、それをすることが当たり前なことのようない感じで自然にお互い高校でカフェをはじめたんですよ。

松田 どうするのかって話はしてないんだ？

田中 どうするのじゃなくて、もうやるのが当たり前で、どう工夫して来年もやるかとか、自分たちの法人がどう生き残っていくかだとか、生徒たちのニーズは明らかにあるし、学校には良き理解者の先生たちもいるぞと、じゃあどうやる？って。この委員会と一緒に、どうポジティブに転がしていく

かっていう話ですよ。普通は、こういう新しいことを始める時って土台の部分でそもそもどうなんやってことでケンカしたりするんですけど、そういうことは一切なく、横浜と大阪という同規模の都市で奇妙にも同時期に始めたというのが面白いなあって思っています。

高橋 決まったものがあってこれをやろうってことじゃなかったってことですよ？今はこういうものができているけど、もともとの違いがあって、それは何だろうって振り返ると、また見えてくるものもあるかもしれませんね。ちょっと振り返って元々の流れをたどっていくことでまた見えてくるものがあるんじゃないですか？

田中 いまカフェをやったり、これから居場所カフェをやるNPO法人の人たちにはそういう部分を知ってもらいたいですね。「ぴっかりカフェ」や「となりカフェ」という形式が当たり前になっていってんですけど、教育委員会予算になると、さらに当たり前なことになっていくので、我々がこうやって毎年毎年切り拓いているということを発信していかないといけないと思います。

松田 私の根源的な部分を振り返ると、学校の中にヴィレッジ・バンガードを作ったんですよ(笑)

石井 ヴィレバンかあ～。

松田 そう！だけど目の前の生徒たちは文字を読みたくないですよ。学校の中のヴィレバンというコンセプトはもしかしたら当たりなんだけど、でも、最初に描いた理想のようなものがあるんだけど、それは目の前の生徒たちを見ながら、そんなんじゃないって少しずつマイナーチェンジして、今に至るみたいな感じなんですよ。

石井 やりたいことを突き詰めていくんじゃなくて、柔軟にやりたいことを目の前のニーズに合わせてアジャストしていくかみたいなのが、辻田さん(ドーナツトークスタッフで校内居場所カフェ創設者)や松田さんにはあるんでしょうね。

松田 やりたいっていうのも、私がやりたいんじゃなくて、この生徒たちに必要なのは図書館じゃなくてヴィレバンなんだっていうこと。そして、学校じゃなくてスタバなんだってことがわかったときに、そういうことが言葉として出るみたいな感じですね。

田中 人は重要ですね。やっぱり松田さんというか、松田さんのような人がいなかったらこうはならなかった。

石井 それはそうだ。

松田 どの人が抜けても田奈高校の場合はダメだったよね。

石井 それもそうだ。

一之瀬 川崎は間違いなく、田奈高校の前例がなかったらできてなかったですよ。多分、うちと川崎高校との連携というのは行ったとは思いますが、でもカフェ形式ではぜったいなかったですよ。

田中 カフェ形式にこだわるって大事ですよ。自分は少しずつ仕事を減らしていきたいと思っていて、次の法人に徐々に仕事を委ねていくと思うんですけど、カフェ形式だけは残して欲しいと思いますね。毎日の振り返りやなんやらメニューやら、カフェ形式を維持していくのは大変なんですけどね。

松田 でも致し返しだよね。カフェをやればすべてが上手くいくかのように思われがちだし、そこから先になんでこれをそもそもやっているのかってことに思い至らないかもしれないじゃないですか。

石井 そうですね。こども食堂のブームにその危惧を若干感じますね。では、最後に鈴木さん、まとめっぽいことをお願いします。

鈴木 はい(笑)。皆さん、お疲れさまでした。

一同 お疲れさまでした。

鈴木 実に楽しい委員会でした。何が楽しいって、日頃から「評価」だとか、「エビデンス」ということについて思っていることを出し切れたことです。私は臨床心理学を専門としているんですけど、心理学は「心」という目に見えないものを、どう数値化、可視化していくか、ということと150年以上格闘しながら発展してきた学問なんです。

私自身も、大学院時代は5年間「エビデンス・ベースド(根拠に基づく)」ということと、その限界に向き合ってきました。こうした経験を経て、今ソーシャルセクターで言われる「数値」や「エビデンス」ということが、子ども若者問題や貧困問題、その支援について本当に一部の、それも本質ではない部分しか捉えていないことを憂慮してきました。

また、部分的、表面的であるばかりでなく、数値の成り立ちもご都合主義で、指標として脆弱で

あるということも、それらを根拠に社会や政策を動かし得るのだろうか？と、不安に思ってきましたが、そんな想いをすべてぶつけることができたのがこの委員会でした。

高校生を対象として学校で実施してもらった調査指標として、現実には実施可能なところに落ち着かせていかなければならないので、当然その想いのすべてが今回の成果指標に反映できているわけではありませんけど、議論の途上で何が問題であるのか、みなさんと議論し、共有できたことは本当に意義深いことでした。

この報告書が多くの皆さんに届くこと。そして、1人でも多くの方が、現実には起こっている目の前の問題や支援と、「数値」「エビデンス」ということとを繋げることがいかに困難であるかに気づき、その困難さに向き合いながら、ひとつ一つ意義あるエビデンスを積み重ねていくという厄介な活動に参加してくれることを願っています。

石井 ありがとうございました。それでは皆さん、これで平成28年度の成果指標委員会を閉会致します。

委員会開催記録

第一回委員会 平成 28 年 7 月 23 日 第四回委員会 平成 28 年 11 月 19 日
第二回委員会 平成 28 年 8 月 20 日 第五回委員会 平成 29 年 1 月 22 日
第三回委員会 平成 28 年 9 月 3 日 第六回委員会 平成 29 年 3 月 25 日

平成28年度
校内居場所カフェ等予防支援に於ける成果指標の作成及び在り方検討委員会

報告冊子「楽しいコトを意味あるコトに、意味あるコトを価値あるコトに」
特定非営利活動法人パノラマ お問い合わせ npo.panorama@gmail.com